

大江町埋蔵文化財調査報告書 第7集

K-696

山形県西村山郡大江町

あてらざわ

左沢楯山城遺跡調査報告書(6)

2004

大江町教育委員会

山形県西村山郡大江町

あてらざわ

左沢楯山城遺跡調査報告書(6)

2004

大江町教育委員会

序

山と森は、私達の一挙一動を、見続けてきた、不動かつ黙したままで……。私達は、あの森から、この山から、表も裏も、確実に観られていて、見抜かれている。(見切られた)人は、(見切った)あの森・この山に、真摯に敬虔に対峙する事はあっても、不遜ではあり得ない。太陽を仰ぎ、月に語りかけ、川を謡い、土を祀った先人の自然思慕一因って、我が左沢楯山城の重みが所以でありましょう。八幡平に立てば、必ずや、町民各位は、「山に向かいて、言うことなし、ふるさとの山はありがたきかな」と「正直な自分に向かうこと」が可能なのでありましょう。町民各位の歴史文化に対するご関心と、関係各位のご支援のもと、お蔭様をもちまして、平成15年度の調査報告書を完成させて戴きましたのも、かくいう「我が大江町民の心」なるが故である、と思われまます。皆様方に衷心より感謝と敬意の念を表するものであります。

平成15年度の調査では、寺屋敷上部・下部、八幡平の発掘調査を実施いたしました。発掘後現れた、目前の曲輪と建物や柵列に関わると思われる多数の柱穴は、「歴史」と「自分」をどのように連結するか……。町民、児童等に対する6月30日の現地説明会では、中世城郭に思いを馳せ、「郷土の歴史」と「本当の自分」を学びとる至福の時を、多数の参加者の方々に感じとって戴けたものと思われまます。

今、町は豪雪の中にありますが、「白雪とわに清からず」の世情風雲を思わせるなか、未来永劫を思うとき、「歴史」と「自分」を軸として、「知ること」・「感じること」の重要性を認識することが、求められているように思われまます。第7集に至りました大江町埋蔵文化財調査報告書が、更なる新しい町づくりの、ささやかな一助となりますことをご期待し、併せて、絶大なるご指導とご厚誼を賜りました各位に、感謝申し上げます。今後とも、左沢楯山城の調査に係る事業に、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

大江町教育委員会
教育長 渡 邊 兵 吾

例 言

1. 調査名 左沢楯山城遺跡発掘調査
2. 調査期間 2003年5月21日～7月17日
3. 調査面積 寺屋敷周辺（C地区） 660m²
八幡平（B地区） 50m²
4. 調査体制
- ・調査主体 山形県大江町教育委員会
 - ・発掘調査指導 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館長 川崎 利夫
 - ・執行体制 左沢楯山城遺跡関連調査委員会

顧問	入間田 宣夫	東北大学東北アジア研究センター教授
委員長	伊藤 清郎	山形大学教育学部教授
副委員長	高山 法彦	大江町文化財保護委員会委員長
委員	鈴木 勲	河北町町史編さん専門員
委員	北畠 教爾	河北町文化財保護審議会委員
委員	金山 耕三	大江町文化財保護委員会委員 山形県立博物館嘱託
委員	誉田 慶信	岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科教授
委員	大場 雅之	(勲)山形県企業振興公社
委員	松田 進	大江町文化財保護委員会副委員長
委員	柏倉 昇	大江町文化財保護委員会委員
委員	片桐 隆	大江町文化財保護委員会委員

- ・事務局 山形県大江町教育委員会社会教育課文化係
 - 課 長／渡辺 泰 聿
 - 係 長／村上 弘 子
 - 主 事／日下部 美 紀
 - 町史編さん事務局員／村上 宗 紀
5. イメージ図調査及び作成 藤井 尚夫（工業デザイナー・中世城郭研究会会員）
6. 縄張図調査 大場 雅之
7. 遺構写真撮影 村上 宗紀
8. 実測及び測量 日下部美紀・石垣義則・宇賀神一志・佐藤展久・山内七恵・吉田満
9. 航空写真撮影 アジア航測株式会社
10. 現地調査における参加者は下記のとおりである。
大江町シルバー人材センター／清野辰連・佐竹与惣治・佐藤昭八・川口邦美
山形大学／宇賀神一志
東北芸術工科大学／石垣義則・佐藤展久・山内七恵・吉田満
11. 本調査は、平成10年度から国宝重要文化財等保存整備として文化庁より補助を受けての調査である。
また、山形県教育庁社会教育課文化財保護室よりご指導を得ている。
12. 中世城郭研究会の八巻孝夫氏・藤井尚夫氏に現地調査等を実施する上で貴重な指導をいただいた。
13. 調査における図面・写真・遺物はすべて大江町教育委員会で保管している。

本文目次

序	1
例言	
平成15年度調査経緯	1
第1章 寺屋敷上部の発掘調査	4
第1節 遺跡の立地と環境	4
第2節 調査方法と調査経緯	5
第3節 発掘調査	6
第4節 出土遺物	9
第2章 寺屋敷及び寺屋敷下部の発掘調査	10
第1節 調査方法と調査経緯	10
第2節 寺屋敷南辺の試掘調査	11
第3節 寺屋敷下部の発掘調査	12
第4節 寺屋敷の出土遺物	13
第3章 八幡平の発掘調査	14
第1節 調査方法と調査経緯	14
第2節 発掘調査	15
第4章 縄張図調査	16
D地区（裏山）の縄張図調査	16
第5章 成果と課題	19
第1節 調査の成果と課題	19
第2節 保存・整備・活用	20
報告書抄録	

図版目次

第1図	左沢楯山城全体図	1
第2図	大江町主要部と遺跡位置図	2
第3図	左沢楯山城遺跡調査概要図	3
第4図	寺屋敷上部曲輪周辺図	4
第5図	寺屋敷上部曲輪発掘区設定図	5
第6図	寺屋敷上部遺構配置図	7
第7図	寺屋敷上部発掘区断面図	8
第8図	寺屋敷上部曲輪出土遺物実測図	9
第9図	寺屋敷南辺遺構配置図	10
第10図	寺屋敷トレンチ断面図	11
第11図	寺屋敷下部曲輪トレンチ設定図	12
第12図	寺屋敷南辺出土遺物実測図	13
第13図	八幡平曲輪周辺図	14
第14図	八幡平遺構配置図	15
第15図	D地区（裏山）縄張図	17

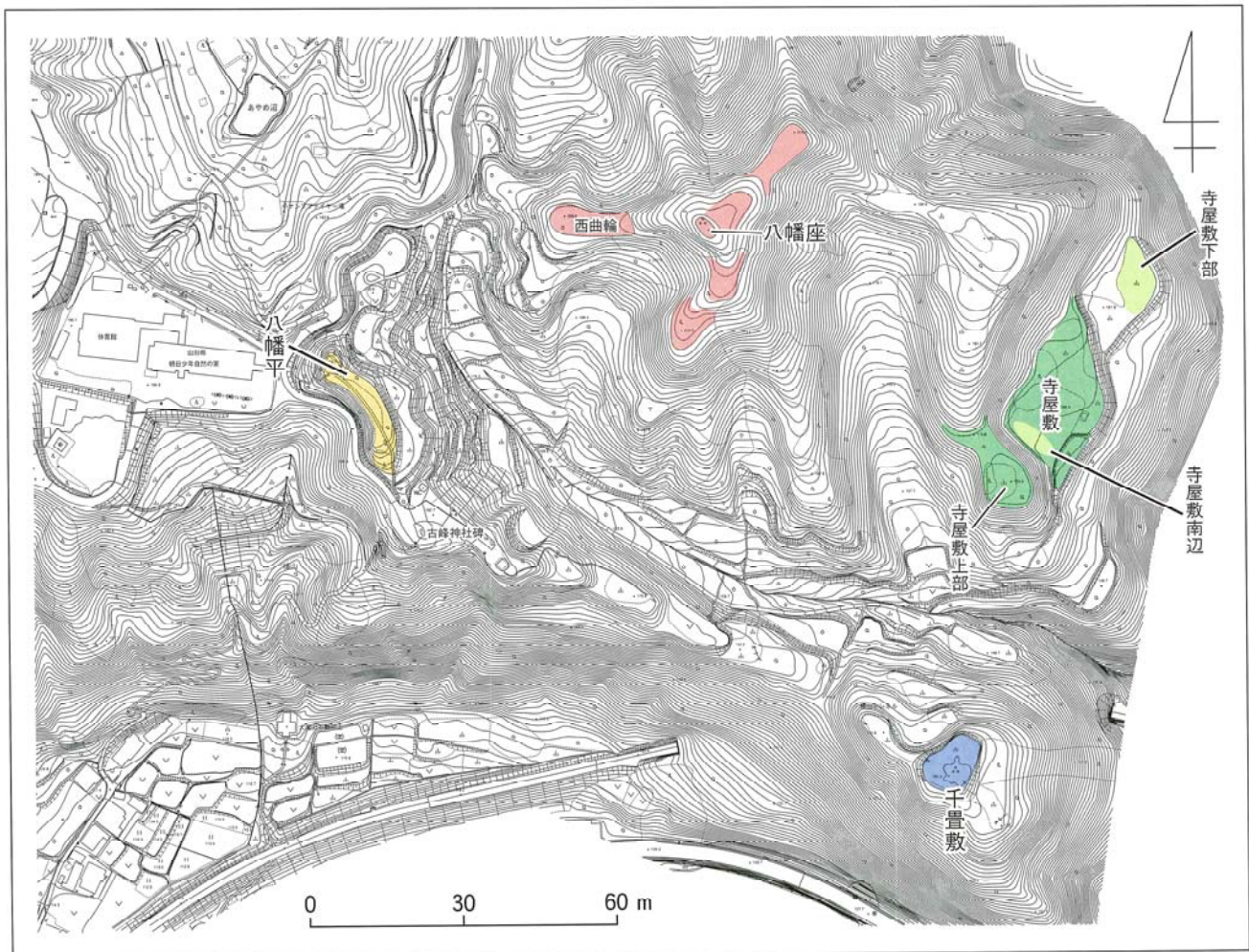
写真目次

写真1	寺屋敷上部曲輪出土遺物	9
写真2	寺屋敷南辺出土遺物	13
写真3	曲輪Ⅶの南側斜面の曲輪群	18
写真4	天神越え道の案内石柱	
写真5	現地説明会状況	21
写真6	左沢楯山城遺跡全体	22
写真7	寺屋敷上部遺構状況	
写真8	寺屋敷上部発掘調査前状況	23
写真9	寺屋敷と寺屋敷上部間の急崖	
写真10	寺屋敷上部岩盤整地状況	
写真11	寺屋敷上部G発掘区切岸部分遺構状況	24
写真12①	寺屋敷上部A発掘区門跡	
写真12②	寺屋敷上部A発掘区門跡	
写真13①	寺屋敷上部柱穴	25
写真13②	寺屋敷上部柱穴	
写真13③	寺屋敷上部柱穴	
写真14	寺屋敷上部D発掘区布堀跡	26
写真15	寺屋敷上部D発掘区布堀跡1	
写真16	寺屋敷上部D発掘区布堀跡2	
写真17	寺屋敷上部E・G発掘区遺構状況	27
写真18	寺屋敷上部からの眺め	
写真19①	寺屋敷南辺遺構状況	28
写真19②	寺屋敷南辺遺構状況	
写真20	寺屋敷下部発掘調査前状況	29
写真21	寺屋敷下部トレンチ設定状況	
写真22	寺屋敷下部測量状況	
写真23①	八幡平遺構状況	30
写真23②	八幡平遺構状況	
写真24	現地説明会状況	31
写真25①	左沢楯山城遺跡イメージ図作成調査状況	
写真25②	左沢楯山城遺跡イメージ図作製調査状況	

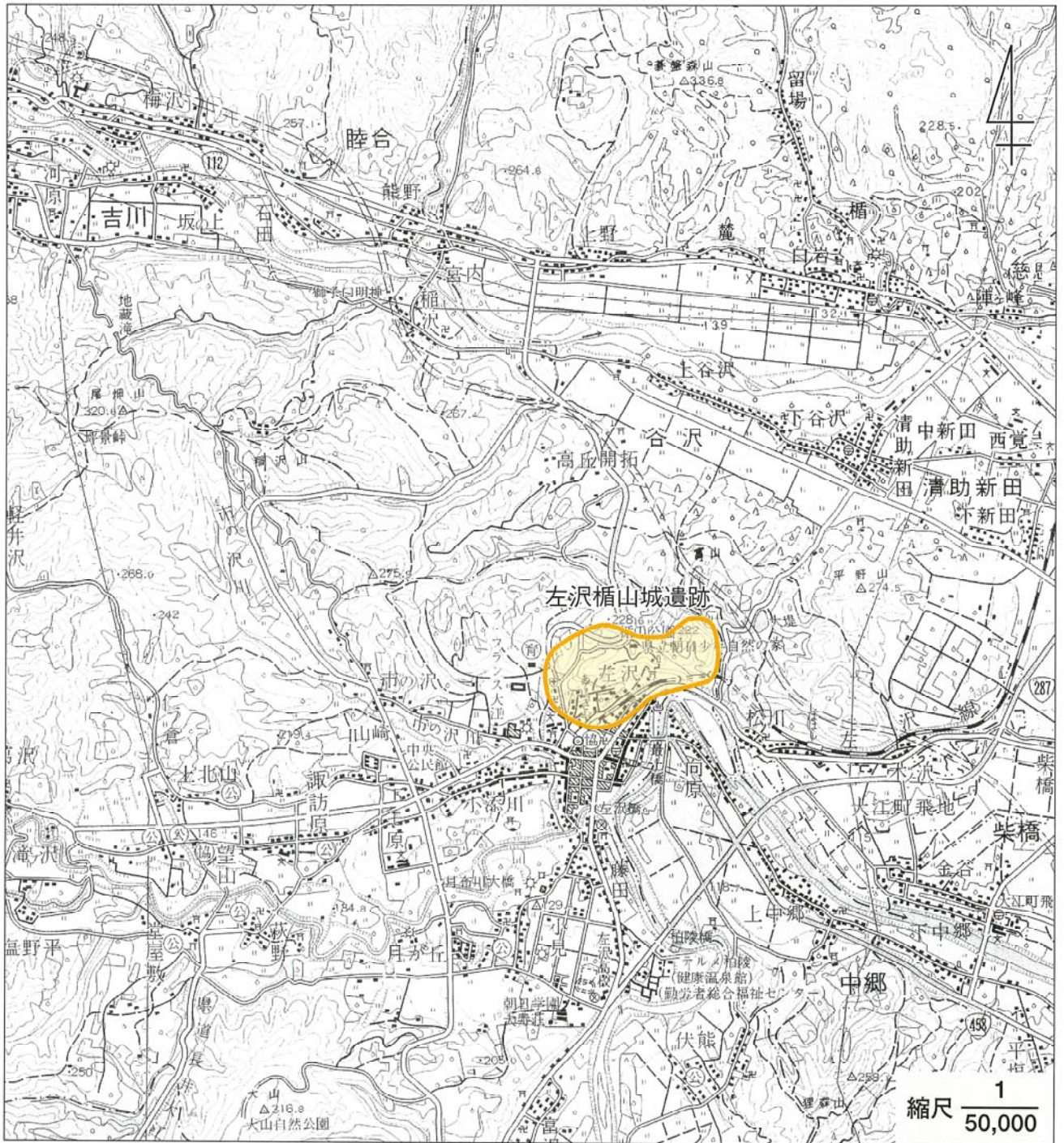
平成15年度調査経緯

平成5年度から始まった左沢楯山城遺跡の調査は今年度で11年目をむかえる。その中で、全体平面図は平成14年度に完成し、縄張図はまとまりつつあり、徐々にその性格、城の堅固な防御性が明らかになってきた。発掘調査については、広大な面積を有するため十分な調査が出来ているとは言えないところがある。概要図（第3図）よりA～D地区の中で、A地区については「元屋敷」、B地区については「千畳敷」・「八幡平」、C地区については「寺屋敷」及び「八幡座」周辺の発掘調査を実施している。D地区の発掘調査は実施していない。各地区の主曲輪を中心にその性格を明らかにし、中世城郭—左沢楯山城の全体像を探ってきた。

平成5年度の文献・聞き取り調査から始まり、試掘・発掘調査、縄張図調査など、これまでに把握できている調査資料を基にして、新たに、誰にでも当時の左沢楯山城が分かるような、そして、想像できるようなイメージ図の作成を実施した。イメージ図は、中世城郭研究会の藤井尚夫氏に依頼し、平成14年度末から進め、平成15年5月から現場での踏査を実施し、これまで数回にわたり現地を踏んでいただいた。地形が一部変わっていることが明らかな箇所については変更前の地形図を基に、いろいろな角度から左沢楯山城を調査していただいた。このイメージ図により子どもから大人まで、我がふるさとの歴史と文化に興味を持ってくれる人が増えることを期待している。



第1図 左沢楯山城全体図



第2図 大江町主要部と遺跡位置図

今年度調査は、平成15年5月21日から実施したが、発掘現場までの道路状態が非常に悪く、それを修復することから始まった。発掘現場の下草刈り及び縄張図調査区の藪の伐採などの準備を2日間行ない、5月26日の歛入式をむかえた。調査箇所はC地区寺屋敷周辺とB地区八幡平である。5月26日から6月5日まで実働9日間で昨年度試掘調査を実施した寺屋敷上部の調査を行なった。試掘調査で設置したトレンチから平面全体に調査区を広げ、遺構の有無を確認しその性格や遺跡全体の中の位置付けを明らかにすることを目的に進めていった。

続けて6月6日から現場を寺屋敷に移す。6月10日まで実働3日間である。ここは、寺院と考えられる建物に付随する池状遺構の性格を明らかにする調査を実施した。池状遺構とする石組列の東側に確認している柱穴の広がりを見明らかにすることを目的に進めた。

第1章 寺屋敷上部の発掘調査

第1節 遺跡の立地と環境（第1・4図）

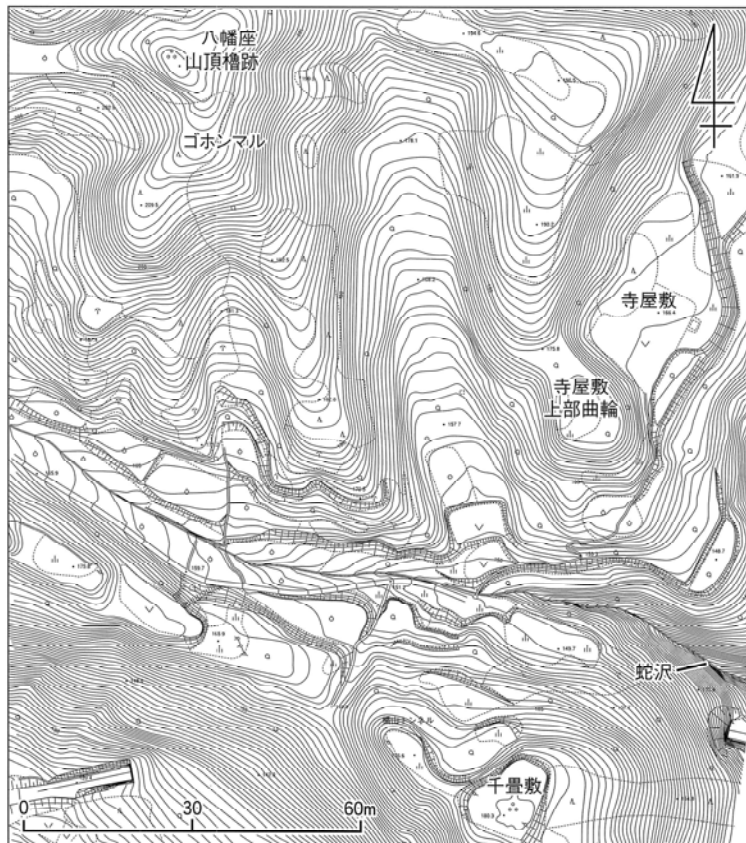
南から北に向かって流れる最上川が東へ屈曲する北側一帯の丘陵に展開する左沢楯山城は東西1.7km、南北0.8kmにわたる大規模な山城である。先年発掘調査された最頂部は標高221.4mで、せまい場所に櫓台が立っていたことがわかった。その下の切岸をへだてて南へ下がったやや広い平坦地が「ゴホンマル」と呼ばれ、調査の結果、^{ひさし}廂付きの大型の建物があり、左沢楯山城の中心的な重要な曲輪であったことが分かった。

いわゆる本丸の曲輪の東側に2列にわたり、南に下る曲輪列があり、もっとも東側に位置する曲輪列の突端の広い平坦地が寺屋敷の平場の西側に展開する。寺屋敷の西側に比高差10mの急崖による切岸でさえぎられている（第4図）。

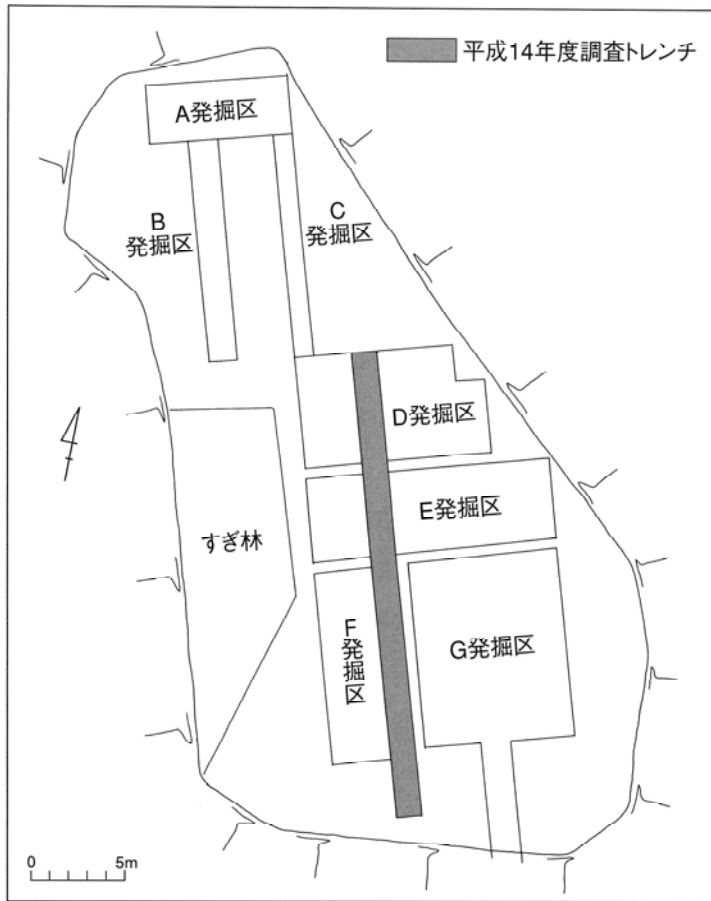
寺屋敷上部のこの曲輪は、ゆるく扇形に南に開き、南北40m、東西の最大幅25m、面積1,000㎡である。北側の上方からの切岸下で標高175.8m、南側のひろがる部分は一段高まり176.5mを測る。

北側の尾根は途中で屈曲しながら、山頂部北側の曲輪に続く。大小8段にわたって曲輪が連なり、その先端に位置するのが本曲輪である。南は3段ほどの小曲輪をへて「蛇沢」の深い溪谷にのぞむ。これと蛇沢を越えて向いあった位置に千畳敷が、いまの「楯山公園」に続く尾根上に展開する。

本曲輪群の西側は、一段下った谷筋に10数段にわたって曲輪群が山頂にむかって連続する。本曲輪との比高差は約20mである。寺屋敷からみると、西から南に囲むように展開するのが本曲輪で、この曲輪の先端に立つと、最上川からその右岸にかけての眺望がよく、寒河江市中郷地区を見晴らすことができる。



第4図
寺屋敷上部
曲輪周辺図



第5図
寺屋敷上部曲輪
発掘区設定図

第2節 調査方法と調査経緯（第5図）

寺屋敷上部曲輪の本遺跡については、5月26日より発掘調査が開始された。

左沢楯山城において主要な箇所だけでもこれまで西曲輪（1996年）・千畳敷（1997・1998年）、寺屋敷（1999・2000年～）、山頂部及びゴホンマル、山頂部北曲輪（2001～2002年）の発掘調査を実施してきた（第1図）。層序はわりと単純で、黒褐色腐植土の下に山砂利を混入する黒褐色土、その下に遺構面が地表より15～20cmで表れる状態なので、遺構検出は容易であった。

昨年度すでに本曲輪中央部に南北にわたる幅1.5m、長さ25mのトレンチを設定して掘りすすめたところ、布堀状の遺構や円形の柱穴跡がいくつか検出されたので、これらを中心に左右（東西）に拡張して、セクションベルトを残しながら基盤層の岩盤まで掘り下げた。トレンチの配置や発掘区域は第5図に示した。発掘総面積は306m²である。

ほぼ全域にわたる調査で主要な建物の配置状況はおおよそ把握することができたが、立木があったり、周辺部にわたる調査で不十分な点があり、細部にわたる検討が残されている。

いずれにしてもこの曲輪に中心的建物があり、その周辺にも2・3棟の小規模な建物が配され、曲輪の切岸に近い縁辺部には柵がめぐり、北端の曲輪に入る入口部には門が構えられていたことも明らかになった。

発掘期間中の後半は、寺屋敷の南側、寺屋敷の北側下の曲輪、八幡平の試掘などを本曲輪の補足調査や図面作成と並行して行なっている。

すなわち5月26日より発掘調査に入ったが、それ以前に草刈りや現場への寺屋敷から上る道を修復し準備を行い、6月27日まで実測や清掃を含め寺屋敷上部の曲輪の発掘を行い、6月30日の現地説明会は本曲輪で実施した。

第3節 発掘調査（第6図）

昨年度の試掘によって発見された布堀による柱穴列を全面にわたって明らかにするためにD発掘区を設けて、まず布堀の建物とその周辺の建物との関連を把握するところから発掘作業を開始した。それをさらに拡張し、E・F・Gの各発掘区を掘りすすめ、これらの区域において100余りの円形や方形の柱穴群を検出した。

それよりさらに南端の切岸にのぞむ辺りまでトレンチを拡張した。この辺りは15cm内外の浅い部位で岩盤に達し、角柱を埋め込んだ柱穴や岩の亀裂を利用した溝跡のような東西に走る排水溝と考えられる岩盤を掘り込んだ遺構が検出された。1.5m幅の狭い範囲なので、これらの溝がどう走行するかは不明である。

これらの遺構を検出した後に、逆方向にあたる北側上部曲輪の切岸下A発掘区の精査を行った。西側に円形の柱穴が2列に並び、2mの間隔において、東側に角柱列が並ぶ様相が発掘された範囲内で検出をみたが、その間の柱穴が途切れるあたりが入口で、この曲輪に入る出入口が設けられていたものと考えられる。

すでにこの曲輪の東側から、建物群を区画するように南と北にまわる柵列が検出されているが、全面にわたって柵列によって囲まれていたものと推測される。入口の柵もこれらの柵につながるものと思われる。

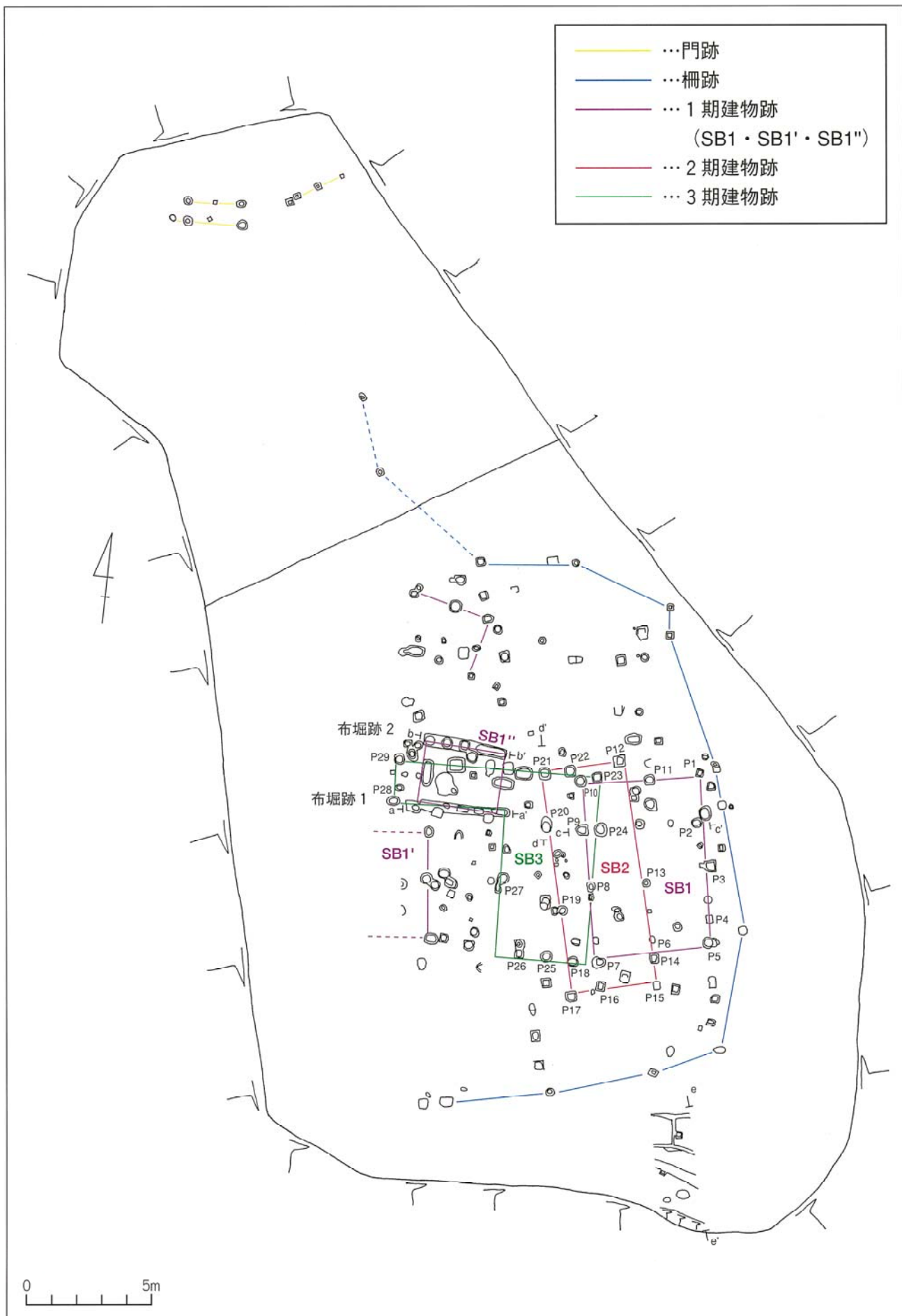
さて、柵によって囲まれた内部の建物施設は、先に述べた布堀による柱穴列をはじめ、大小また角柱穴・円柱穴が複雑に入り混り、同一建物と認定する上できわめて困難であったが、少なくとも3期にわたって規模を異にする建物があったと考えられる。これらの新旧関係は、2つ間隔を置かず並んでいる柱穴の深浅の度合や切り合っている柱穴の状況、その他柱穴の大きさや形から推定したものであり、一つの試案にすぎず、さらなる検討が必要である。

この曲輪は南側の遺構が密集する南側が北側に対して50cmほど高くなり平坦にならされている。その段が東西方向にのびている。曲輪の平坦地やや東寄りにもっとも古い時期に建てられたと推定される1期の建物跡がある（SB1）。桁行6m余、梁行5mで、柱間が広く2mを超える。しかしその中間に補助的にやや小さい柱が使用されている。3間×2間の南北棟で総柱であり、倉庫風の建物である。その西側にもう1棟の南北棟の建物があるが、未発掘のため全容が明かにされていない（SB1'）。また布掘りを行って柱を埋設した建物がSB1'の北側に配置されている（SB1''）。これは独立した建物で、小規模ながら堅固な作りで、武器庫のような施設であったと考えられる。桁行3m、梁行2.5mである。これらの建物群の北側にも、岩盤を穿った柱穴群が発見されているが、規模や時期を特定するまでは至っていない。以上のように1期には少なくとも3棟の建物が並んでいたことがわかる。

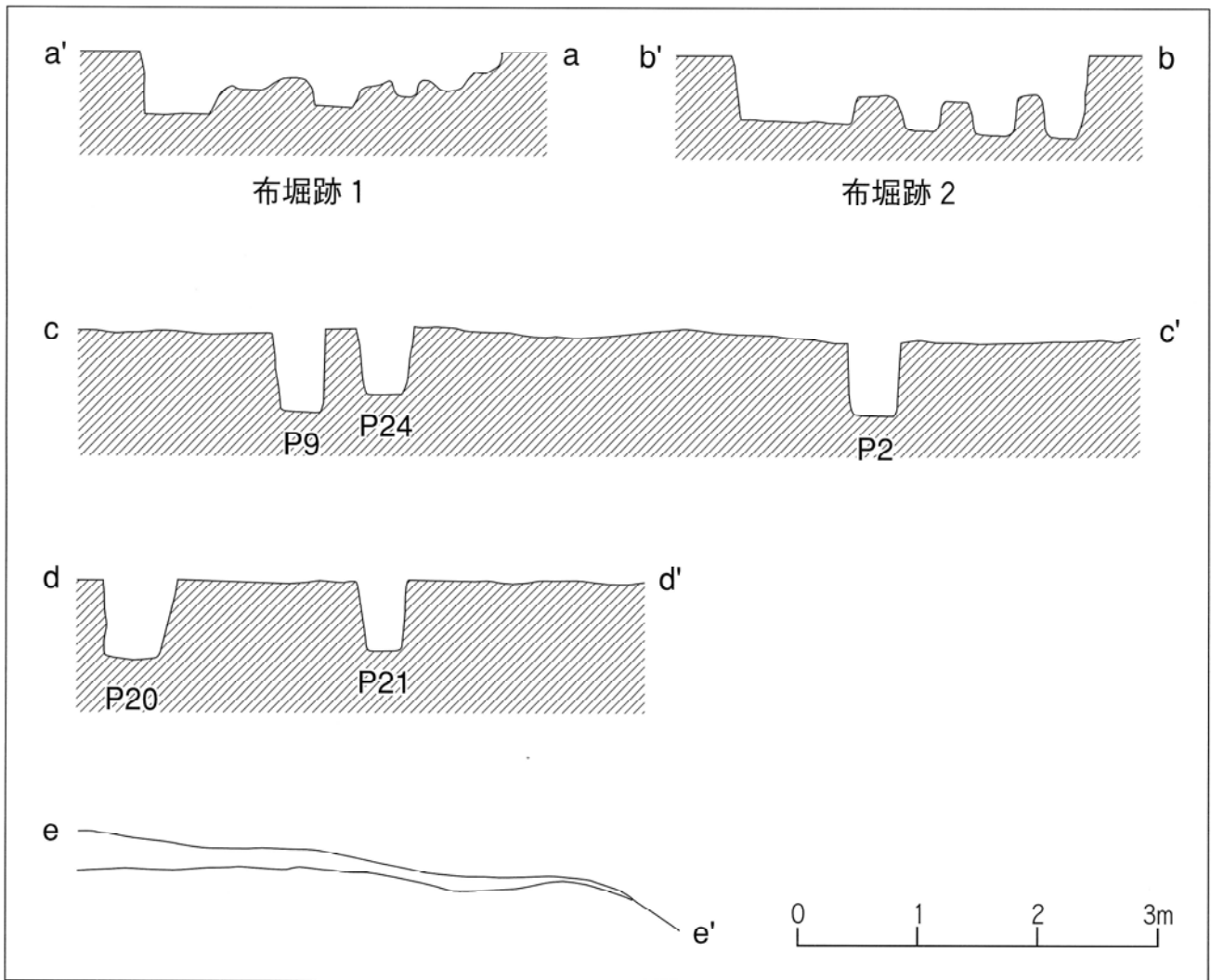
2期にはSB1の建物に半ば重複する形で桁行4間、梁行2間の南北棟が出現する（SB2）。桁行8.5m、梁行3.6mで南北に長い。しかも梁の柱は等間隔ではなく、2.1m：1.5mの間隔で、間支切りもあったようである。2期の建物があったころSB1'やSB1''が存在したかどうかは不明である。

そして最後の3期は、SB1とSB2に重複して桁行3間、梁行2間の南北棟がやや方向を変えて建てられる。7mと4mの規模である（SB3）。SB3に対して1期に独立して存在した小規模な建物が建て替えられて、桁行2間、梁行1間、3.5mと2m程度の東西棟となり、SB3と接続し、曲り屋のような形となる。

以上のように寺屋敷上方の曲輪は、一段高まった南側に建物があり、これらは短時間で3期にわたる変遷をたどっていることがわかる。各期とも複数の建物群によって構成され、これら建物を囲む柵列



第 6 図 寺屋敷上部遺構配置図



第7図 寺屋敷上部発掘区断面図

がめぐり、さらにやや広い空間が北側へ伸びて、北にはこの曲輪建物群に入る門が設けられ、柵で囲まれた通路をへて一段高い建物が建っている場所に到達することができるのである。

なお、柱穴の状態は、方形よりも円形が主で、径30~40cm、深さ50~70cm程度のものが多かった。やはり岩盤にあけられた柱穴が多く、岩盤のないところでは、扁平な丸石を底に配したものもあった。ちなみにP20の柱穴をみるに、径45cm、深さ75cmあり、底面に径10cmの平らな丸石が置かれていた。おおむねこれまでの柱穴の状況と異なるところはない。

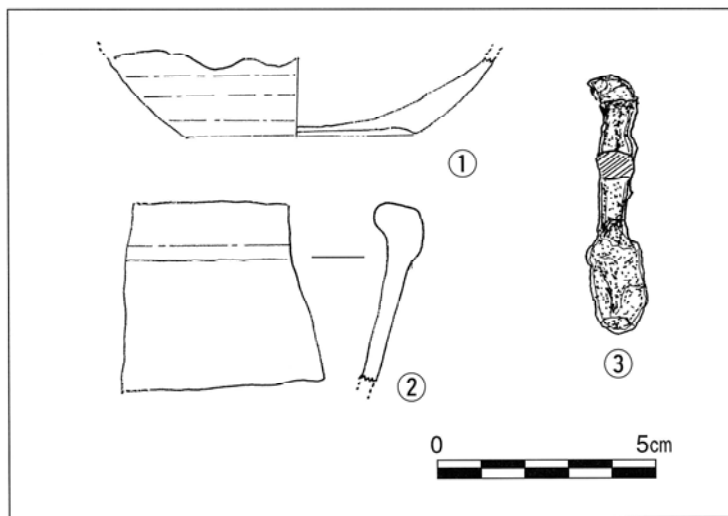
おそらく建物群の時期も左沢楯山城が主要な部分で機能していた16世紀後半より17世紀初頭の数十年間とすることが至当であろう。柵列はこの間に設けられて、建物と異なり立て替えがなかったようである。

第4節 出土遺物（第8図・写真1）

これまでの出土遺物と同様に、この度の遺物もきわめて少量であった。ほとんどは埋土中からの出土遺物である。主として3 cm未満の陶磁器の小破片で、ほか、角釘が1点出土している。

磁器片18点、陶器片6点の24点と角釘が出土遺物のすべてである。磁器片は染付の跡がうかがわれる肥前系のものに若干の中国輸入磁器が混じる。いずれも細片である。陶片のなかには表面素焼きで内面に細かな貫入のある灰釉を施したものがあり、外面にロクロ削り、黒班が認められる（第8図①）。もう一片灰白色の釉を施した小型のこね鉢の破片などがある（第8図②）。

陶磁片は17世紀の廃絶時のものと考えられ、中に後世にまぎれ込んだ小破片の磁器も認められる。角釘は先端部が欠損しているが、本曲輪の建物に用いられたものであろう。（第8図③）



第8図 寺屋敷上部曲輪出土遺物実測図



写真1 寺屋敷上部曲輪出土遺物

第2章 寺屋敷及び寺屋敷下部の発掘調査

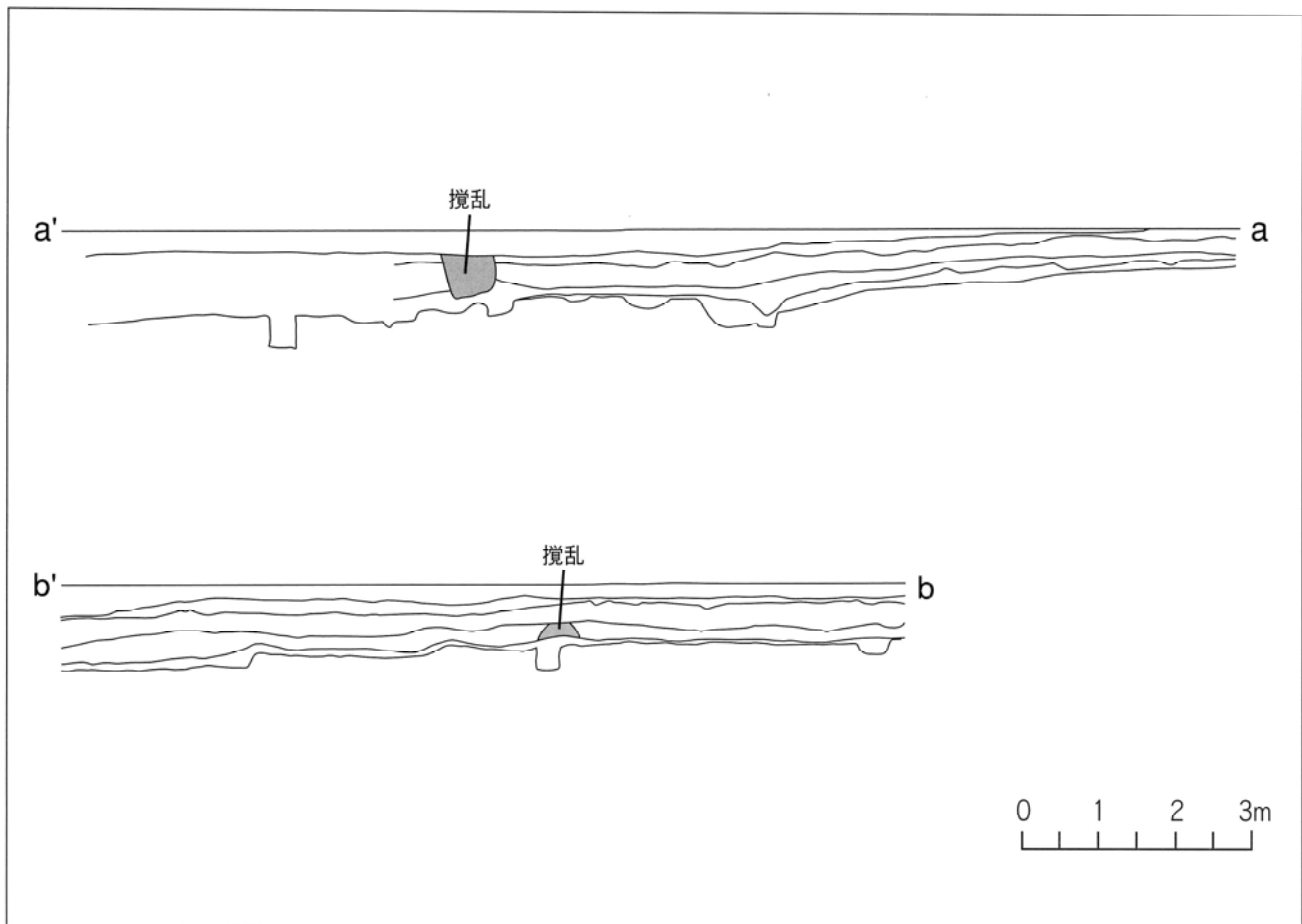
第1節 調査方法と調査経緯（第9・10図）

第1章で述べた曲輪の東側下に位置する平坦地が、寺屋敷である。桧木沢が東に、蛇沢が南に谷を刻む465m²の比較的平坦地である。すでにここの発掘調査は、2000年から開始されその都度発掘の状況について報告している。この度は、寺院遺構や池状遺構が発見された南辺の下からの道につながる狭窄部の手前の辺りに設定したトレンチを主体に東西に長く18m、幅2mほど発掘した。池や寺院が発掘された地点の南辺には、建物の柱穴列が存在するのか、またどのような遺構が存在するのかをさぐるための試掘である。

寺屋敷上部の曲輪の状況についておおよそ目途がついた6月6日から10日までの3日間発掘作業、7月2日と9日に実測を行った。



第9図 寺屋敷南辺遺構配置図



第10図 寺屋敷トレンチ断面図

第2節 寺屋敷南辺の試掘調査（第9・10図）

寺屋敷池状遺構の東側には、ちょうど東から池を眺める位置に2間四方の縁の付いた建物跡が検出された。昨年度の報告書では茶室風の雅びの場であった可能性があることを述べた。

今年度の試掘調査では、これまでと同様の規模の円柱痕など31基発見されたが、これらは昨年発掘された池状遺構東側の建物とは別棟である。トレンチ内で柱間210cmのものがあるが、同じ建物の柱ではあってもこのまま完結するのではなく、もっと南辺へ延びる可能性がある。

また、池状遺構よりの西側から発見された柱穴も別の建物であったと思われる。この柱穴は円柱を主体とするが、2つ隣り合ったり重なったりする柱穴があり、少なくとも2回建て替えがあったことは確かである。

以上のように南辺にも建物があり、これらは2回建て替えられていることが明らかになった。今後寺屋敷に蛇沢から上る入口部まで発掘区をひろげ、この度の試掘によって発見された柱穴群との関連を把握することが必要であろう。

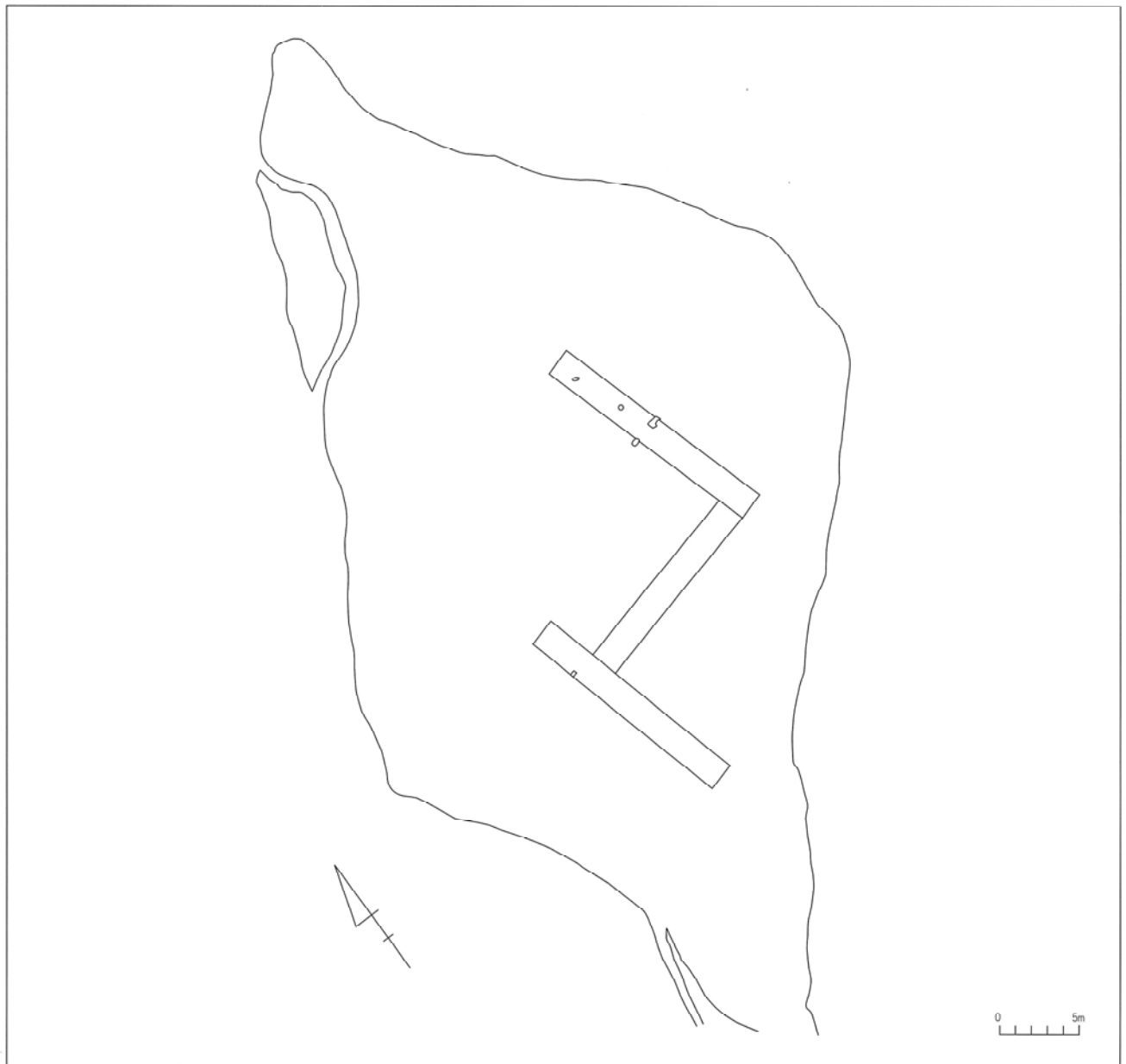
第3節 寺屋敷下部の発掘調査（第11図）

寺屋敷北側の一段下がった平坦地は、平面南北に長い長菱形をなすが、寺屋敷よりひとまわり狭い曲輪である。この曲輪の中央部に東西と南北へ鍵形に幅2m、長さ44mのトレンチを設定した。なお、寺屋敷との比高差は4mである。6月10日よりほぼ3日間この試掘に当てた。

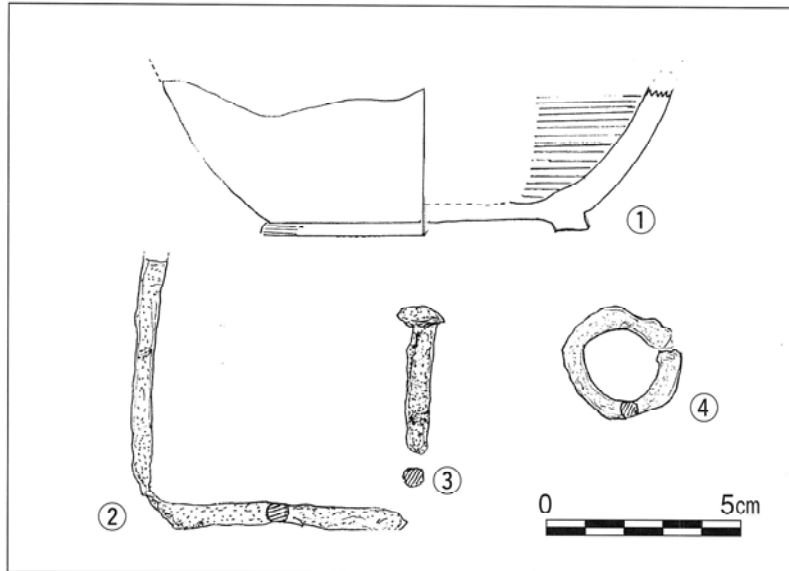
この曲輪の面積は寺屋敷には及ばないものの平坦で、西側は急崖、東側と北側は急な斜面を形成して桧木沢に至る。東南側に2～3段の小平坦地があり、小規模な曲輪をへて桧木沢にのぞむ。

良好な曲輪のようであるが、設定したトレンチ内（面積90m²）からは、ほとんど遺構らしいものは検出されなかった。ただ南北にのびたトレンチの北側から、20cm程度の円形の柱穴がそれぞれ離れた場所から検出された。

これまで、調査した大方の曲輪の縁辺部より柵列などが確認されているが、柵列があったかどうかは不明である。おそらく小屋程度の施設はあったと思われるが、規模の大きい施設は存在しなかったのではないだろうか。出土遺物もなかった。



第11図 寺屋敷下部曲輪トレンチ設定図



第12図 寺屋敷南辺出土遺物実測図

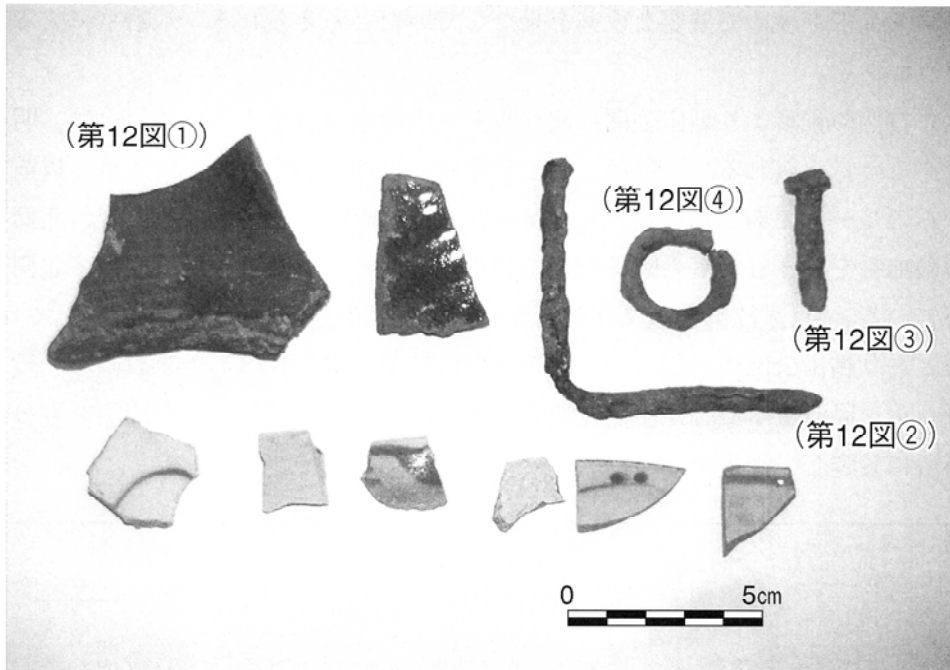


写真2 寺屋敷南辺出土遺物

第4節 寺屋敷の出土遺物 (第12図)

左沢楯山城においては例年、出土遺物はきわめて少ないが、その中でも小破片ながら寺屋敷池状遺構とその周辺からは、白磁・青磁・景德鎮産の磁器など比較的多く出土をみた。

この度の調査区は面積が比較的狭いこともあって磁器片11点、陶器片2点、釘などの鉄片3点の出土が確認された。磁器片はいずれも小破片でおおむね肥前系磁器、陶器片は1片が5cm程度の黒灰色の底部破片で須恵系である。高台壺の底部破片であろう(第12図①)。もう1片はあとで紛れこんだと思われる小片で、海鼠釉による小片である。江戸時代後半とみられ地元産と思われる。

鉄製品では折れ曲がった角釘、角釘の上部片、指貫と思われる外径2.5cm、内径1.8cmの環状をなし、一方が僅かにあいている環で、断面隅丸方形のものである(第12図②③④)。

その他木炭片が少量出土している。

第3章 八幡平の発掘調査

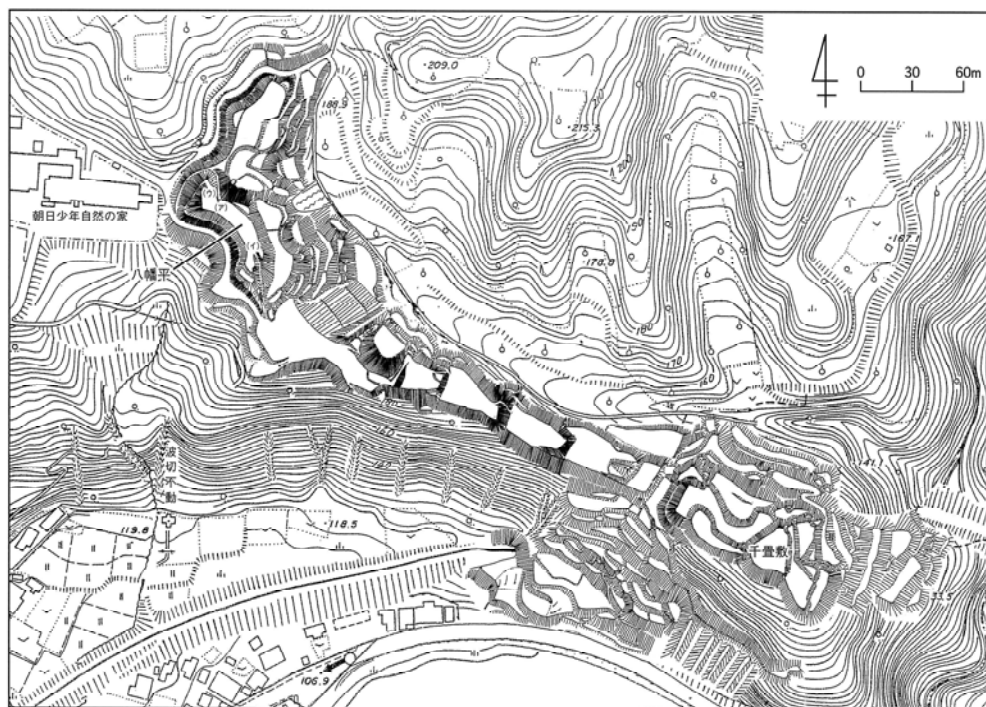
第1節 調査方法と調査経緯

山頂八幡座の西方約200mほどのところで、標高が206.7mであるところに八幡平がある。この場所は以前、寒河江から分霊した八幡宮が祭られ、このように呼ばれるようになったようだ。八幡平は、左沢楯山城遺跡調査概要図（第3図）の南東尾根上にのびるB2地区の最高所である。最上川に対して山頂八幡座よりも手前であり、非常に眺望がきき、最上川はもちろんのこと左沢の町並が広く見渡せる位置にある。八幡平は、現在舟歌碑がたち、最上川ビューポイントとなっている通称楯山公園の西側に5～7mほどの高さをもって、50m×10mの彎曲した形状の平場である。

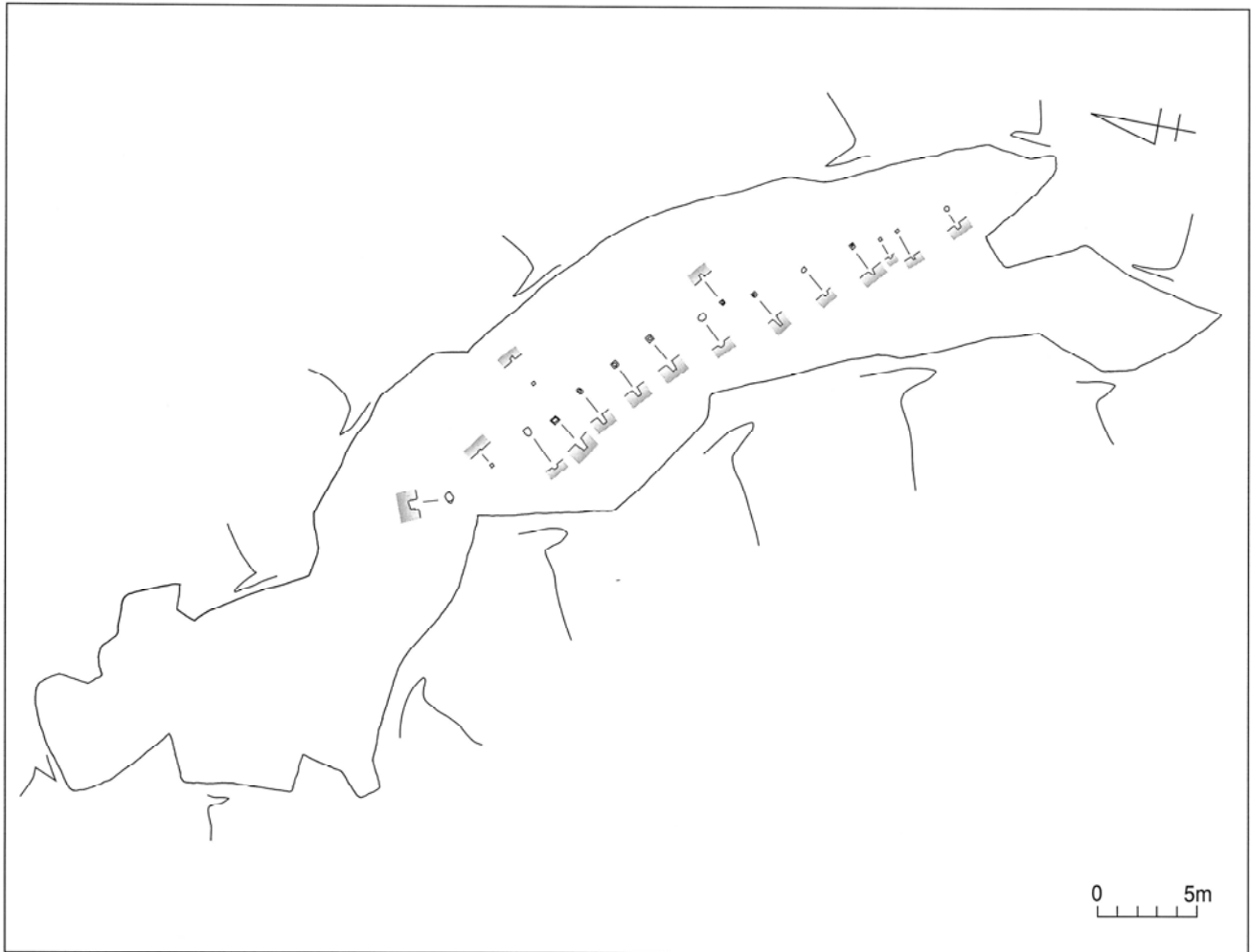
縄張図調査によると、ここは、政治的・軍事的に主要な建物を配置するのに十分な広さではないが、非常に急峻でしっかりした切岸を持ち、左沢楯山城西側を抑える上で、また、山頂である八幡座周辺へのルートを防御する上でも極めて重要な役割を果たしていたと考えられる。八幡平に入るルートは3箇所（ア・イ・ウ）がある。

現在、朝日少年自然の家裏より楯山公園に向うルートの途中から上るルート（ウ）は、明らかに近年造られたルートであると考えられる。（イ）は、楯山公園造成に伴い整備されているが、以前は南東に広がる広大な曲輪からのルートであったと思われ、腰曲輪で防御を固めている。そして、北側の谷に向かっては3段ほどの腰曲輪を築き谷からの敵に睨みを利かせている。（ア）は、土橋を経て北側に広がる曲輪群の虎口となっている。（『大江町埋蔵文化財調査報告書第3集』第3章）

ここは前述のとおり楯山公園の一部であり、造成の際に芝が敷かれベンチを設置し一般に開放されているため、トレンチを設定することが困難であることから、ほぼ中央に2mの間隔をもって40cm四方のグリッドを17箇所を設定し、調査を進めた。



第13図 八幡平曲輪周辺図



第14図 八幡平遺構配置図

第2節 発掘調査

平場のほぼ中央に設置した調査区（17箇所）は、芝をはがし15～30cm程度で岩盤に達する。平場はやや傾斜しており、岩盤が一部見えたり、芝をはがすとすぐ岩盤が確認できるところもある。設置した調査区からは、1.5～2m間隔で地形に対してほぼ一列に16の角柱列が確認できた。柱穴の大きさは径30～50cm、深さは50～60cmである。また、支柱になるのか、大きさ径20cm程度、深さ20～30cmの角柱も確認される。ほぼ中央に設置した調査区を境に最上川を望む切岸に向かい岩盤の落ち込みが確認される。平場の一部を掘り下げたが、設置した調査区で確認されるような岩盤は見られない。ここは、第1節でも触れたように、面積約500m²の彎曲した地形であり建物が建つほどの面積があるとは考えられない。縄張図調査の考察より、山頂の八幡座周辺へのルートを防御するために柵列を設置したのであろうか。左沢楯山城の防御性を考える上で、非常に重要な位置であることは推測できる。ただ、公園になっているため、全体に対して調査面積が非常に小さいので、発掘調査から八幡平の性格が十分に把握しきれていないこともあり、今後の検討が必要不可欠である。

これまでの調査でも出土遺物は極めて少量であるが、ここも同様に遺物は出土していない。以前ここでは「高い山」という行事が行なわれていたため、その際に火を焚いた跡や燃やしたものが出てきたが、左沢楯山城遺跡関連の遺物ではない。

第4章 縄張図調査

D地区（裏山）の縄張図調査

D地区は現在の朝日少年自然の家の北西に位置し、巻くように国道458号が迂回する通称「裏山」と称される丘陵一帯である。その範囲は、国道や作業場・畑等により一部破壊されているが、最大幅東西約300m、南北約400mに及ぶ。昨年度の調査により、標高228mの主曲輪Ⅰを中心として、3方向に連なる尾根上とその斜面に多数の曲輪群が展開されていることが確認され、左沢楯山城西側の防備として、また天神越の道をおさえるという機能を有しているであろうことが推察された。

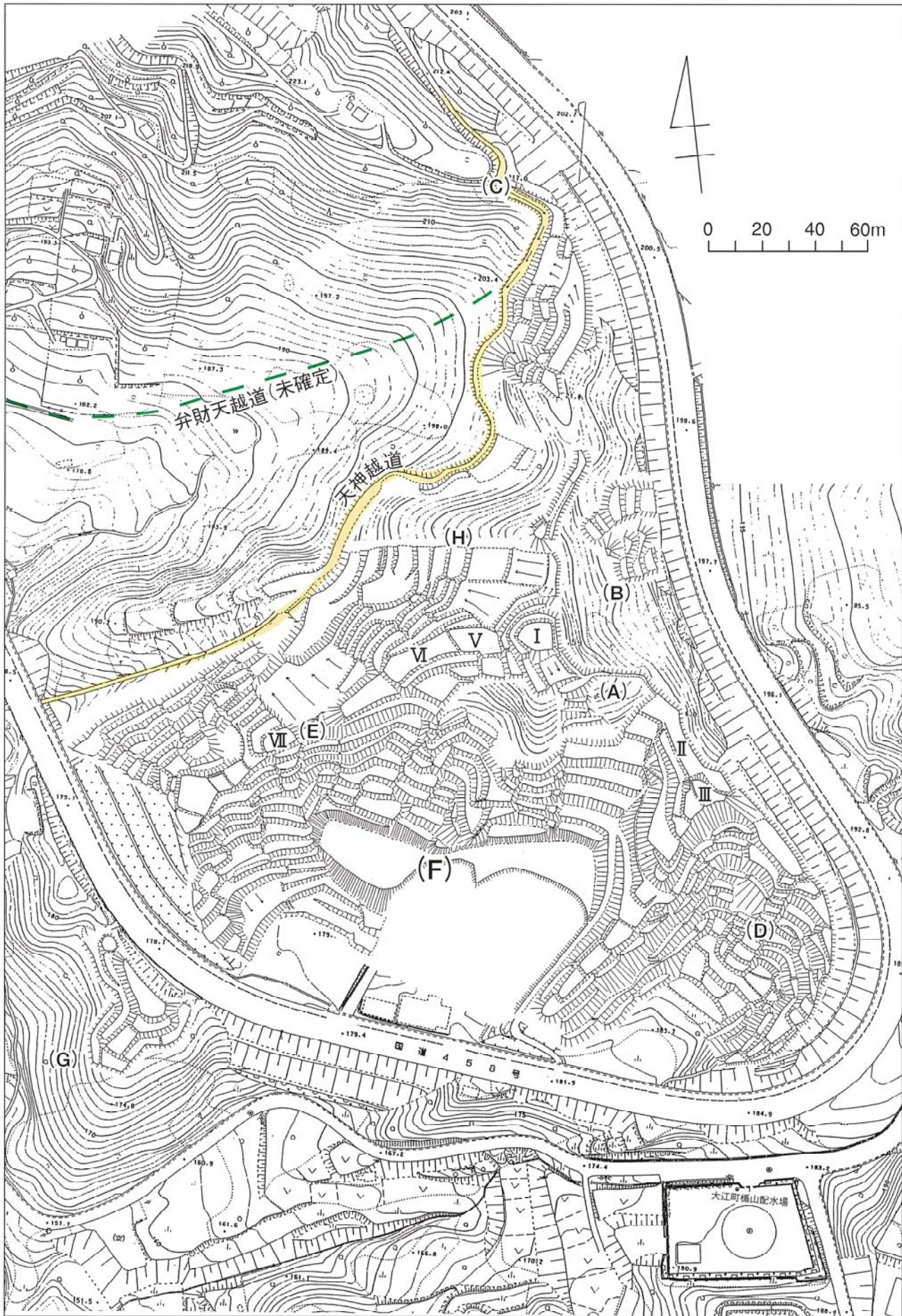
本年度は藪の伐採作業実施により、昨年度調査が及ばなかった南東の谷間及び主曲輪Ⅰから西に延びる尾根周辺の追調査を進め、本地区の全容がほぼ把握された。

主曲輪Ⅰから南東にのびる尾根は、曲輪Ⅱより1mほど一段高い曲輪Ⅲを起点として二手に分かれる。曲輪Ⅲは東西6m、南北13mと比較的狭小であるが、櫓を建てるほどの面積は有しており、南側の腰曲輪とともに南方防備の拠点になる曲輪である。曲輪Ⅲより東寄りに分かれた尾根に築かれた曲輪群は、国道により削剥されているため全容は不明である。その延長は、朝日少年自然の家の造成により削平される以前まであったとされる小高い丘陵に続いていたと考えられ、その丘陵にも何らかの設備があったものと推測される。一方、西寄りの尾根上には帯曲輪を伴った平坦地が数段ほど続き、畑に転用されているものの曲輪の旧態はほぼ留めていると思われる。この両尾根に挟まれた谷間には、階段状に配された10段もの画一的な段形群(D)と、それらと尾根とを連絡する帯曲輪状の平坦地が配されている。しかし上下段の連絡道がはっきりせず、帯曲輪の切岸も甘いことから防御設備としての機能性に疑問が残る。

曲輪Ⅴ・Ⅵを経て西に下降する尾根は、平場(E)で掘り下げられ1.5mほどの段差をもって曲輪Ⅶに至る。一段低い平場(E)は曲輪Ⅶとの高低差を設けるための工夫であり、C地区北外郭にもみられる技法である。この地域の中心となる曲輪Ⅶは、東西12m、南北7mほどで曲輪Ⅲ同様小屋掛けに十分な面積を有しているとはいえない。むしろその南西に広がる僅かな段差で区画された曲輪には、数棟の建築物の設置が可能であり、あるいは兵の駐屯地であったか。この尾根筋の南斜面には、大小の腰曲輪・帯曲輪群が有機的に配備されており非常に堅固な造りである(写真3)。中腹部は、明らかに近年の造作である巨大な平坦地(F)や、国道により寸断されるなどかなり破壊されているが、曲輪群はさらに山裾部(G)にまで達している。ただしこの部分も破壊が見られ、作図は一部に留めた。

一方北側斜面には左沢集落と寒河江市谷沢・六十里越街道とを結ぶ天神越の道が通っており(写真4)、曲輪Ⅵ・Ⅶより連続する数段の平坦面が備わっている。しかし、一部に整地されない緩斜面が残され、杉の植林や土取りによるものか崩れが見受けられるなど南側斜面に比べて造りが粗雑である。主曲輪Ⅰの北に伸びる尾根筋の斜面(H)で曲輪群の連続が途切れていることから、この北側斜面は恐らく造作の途中であったと考えられる。なお、天神越道の北西の谷には弁天越の道(未確定)があって、(C)地点で合流していたと伝えられている。天神越道と弁天越道間の斜面にも段々の平坦地が見受けられるが、畑と判断した。今後裾部(G)と併せてさらに検討する必要がある。

D地区の特徴として、土塁や堀を設けずに大小多数の曲輪群で防備し、特に主曲輪は櫓台程度と小さくその下部により大規模な曲輪を設置するという構造は、八幡座周辺と類似していることがあげられる。この近辺に同様の特徴を有する城館はほとんど確認できず、これは左沢楯山城特有の構造といえようか。また、主曲輪Ⅰを中心としていながらも、3方向に伸びた尾根先にはあたかもそれぞれ独立した拠点を



第15図 D地区(裏山)縄張図

もつ曲輪群が配備されており、分散的な構造を呈しているといえる。分散型城館の典型とされる天童古城に重ねて想定すれば、本地区の機能として、西村山郡に勢力を有する同族等勢力が立て籠もるために、急ごしらえ的に新たに築造あるいは尾根主要部程度に元々あった備えを拡張・増築した可能性も新たにあげられよう。その時期は、巧みな曲輪の配置が見られる一方、曲輪Ⅰより北部分の整備が不完全であり築造途中と思われることから、大江氏が滅ぼされた天正12年（1584年）かあるいは慶長5年（1600年）の出羽合戦といった重大な局面下においてであったと考えられる。

しかし、D地区に関する伝承を含めた史料が全くないため、本地区の一部あるいはすべての平坦地が、廃城以降に畑等として開墾されたものである可能性は払拭しきれていない。今後、発掘調査を含め、西村山郡全域を視野に入れたより総合的な調査・検討が求められる。



写真3
曲輪Ⅶの南側斜面の曲輪群



写真4
天神越え道の案内石柱

第5章 成果と課題

第1節 調査の成果と課題

1. 発掘調査の成果と課題

(1) 成果の概要

発掘についてはすでに詳述してあるので、ここでは概要と特徴のみ記す。

第1に、寺屋敷上部曲輪は、蛇沢をはさんで反対側に位置する千畳敷と呼ばれる曲輪と一体になって、蛇沢から上ってくる敵勢を攻撃できる配置となっている。しかも切岸からの眺望がよく、重要な位置にあることは容易に理解できよう。この曲輪内に3期にわたる建物が建てられ、しかも柵列がめぐらされているのも納得できる。

第2に、寺屋敷下部の曲輪にトレンチを入れたが、遺構らしいものは検出されなかった。切岸には柵列があると考えられるが、造成工事をしたものの、大規模な建造物につくらなかったことになろう。住民の避難所的性格を有する曲輪であろうか。そうであればなおのこと、領主と住民の関係を考える上でも、重要な曲輪となる。なお、寺屋敷から北へ行った所に、井戸があるという指摘が、現地説明会参加者からあった。左沢楯山城では、井戸跡が乏しく、気になることではあったが、今回の示唆は重要である。確認が必要である。

第3に、八幡平と呼ばれる曲輪の発掘においては、柵列が確認された。その後ろに柵を支えたと思われる小柱穴も確認された。つぼ掘りのため全体を明らかにするには限界がある。この場所は、最上川からみたとき、よく見える位置にある。鉄砲場とか旗印を立てる場などいろいろな意見がある。かつてこの八幡平で「高い山」行事が行なわれたという。「高い山」は旧暦4月17日に高い山に登ると願い事がかなうとされて、この日に山に登り宴を催すのが習わしであった。近隣の山では、白鷹山が有名である。

(2) 次年度以降の課題

第1に、蛇沢に落ち込む谷筋に築かれた曲輪群の性格を確認するために、試掘調査をすること。第2に、居館跡を確定するための発掘調査をすること。第3に、D地区つまり裏山地区の曲輪群の性格を見極めるために試掘調査を行なうこと。これらのことが、次年度以降の課題として列記できよう。

さて、今年の「現地説明会」は、平成15年6月30日に実施されたが、今年も午前「小学生の部」と午後「一般の部」の2回に分けて開催した。多くの方々に参会いただいたが、特に小学生の皆さんには、熱心に聞いてもらい、鋭い質問も受けた。町内にある史跡の実態と文化財の大切さを理解してもらうにはとても良い機会である。今後とも継続していかねばならない。

2. 縄張り図調査の成果と課題

(1) 成果の概要

昨年度に引き続き、D地区、通称裏山といわれている地区の調査を実施した。昨年度において北側・東側・南側はほぼ終了していたのであるが、藪が深く未調査の部分が3箇所残されていた。今年度は、その部分の調査を行なった。

このD地区については、昨年度の報告書でも指摘したが、慶長5年（1600年）の出羽合戦に際して急ごしらえした山城ではないかという考えが強かった。しかし、今回の調査をふまえると左沢楯山城の西側、天神越え・弁財天越えの道を押さえる重要な機能を有する曲輪群という位置づけも可能になってきた。それでは築造時期は、左沢大江氏の時代か、その後最上氏直轄時代に入ってからなのか、最上氏時代とすればどの時期なのか、などを検討しなければなるまい。ただ、連続する段々は、畑などの耕作による造成の可能性も全く否定されたわけではないので、慎重な検討が必要である。

(2) 次年度以降の課題

第1に、D地区において道路を挟んだ天神越えの道を登ってくる両側の箇所の調査も必要になってきた。第2に、D地区の北外郭の西側、「あやめ沼」の周辺の調査も必要となってきた。第3に、桧木沢に降りていく斜面の再確認などが、残されている課題である。ただ、D地区に関しては、第1節1（2）でも指摘したように、この裏山地区の曲輪群の性格を見極めるために、調査が必要と考える。

第2節 保存・整備・活用

平成15年11月22日、大江町町民ふれあい会館にて、「中世城郭の保存・整備と活用について」というテーマで公開講座が開催された(主催：大江町)。八巻孝夫氏が基調講演を行ない、パネラーとして、入間田宣夫氏が「仙台城の保存・整備と活用」、藤井尚夫氏が「左沢楯山城イメージ図について」、清野幸夫氏が「西川町安中坊発掘調査報告」、川崎利夫氏が「左沢楯山城発掘調査報告」、伊藤清郎氏が「左沢楯山城の保存・整備と活用」について各発表したのち、会場に参加した皆さんと活発な討論を展開した。

そこで明らかになったことについて2・3指摘すると、まず一般的には、①保存運動としては、行政・研究者・住民の連携が大切であること。全国の研究者との連携も視野に入れておくことが大切である。②整備・復元については、時代を無視しない、整備を急がない、善意の破壊を避ける、整備をしすぎない、歴史を捏造しない、などの見識を持つこと。③活用については、観光資源としては考えずに、住民に親しまれる方向で考えること。過度な整備をせずに、自然を生かす。などが指摘された。

具体的には、①大江氏・寒河江荘関連遺跡群として、西村山地域全体として保存の方向を考えていく必要がある。現在大江氏に関する城郭は危機に瀕している状況であり、左沢楯山城を含めて保存・整備の緊急性を認識することが大切。②指定史跡をめざして、計画的に事を運んでいく必要性。③現段階においても、イラストなどを利用して、左沢楯山城の紹介、史跡を案内するコースの設定など、積極的な活動も行なう。特にこのほど駅前交流ステーションが山形経済同友会から景観賞を受賞しており、左沢駅を出発点にした見学コースを設定し、町民の健康増進のウォーキング等と協力する。④資料館の建設を図り、ジオラマ・資料の展示などをしてみてはどうか。しかも町内の他の資料館や他市町村の資料館との連携も考えてはどうか。

これらの点が提示・議論された。いずれにしても、町民の皆さんに情報公開をきちんとして町民の方々の共感を得、左沢楯山城は地域社会の貴重な財産であるという共通の認識を形成していくことが大切であろう。



写真5 現地説明会状況



写真6 左沢楯山城遺跡全体

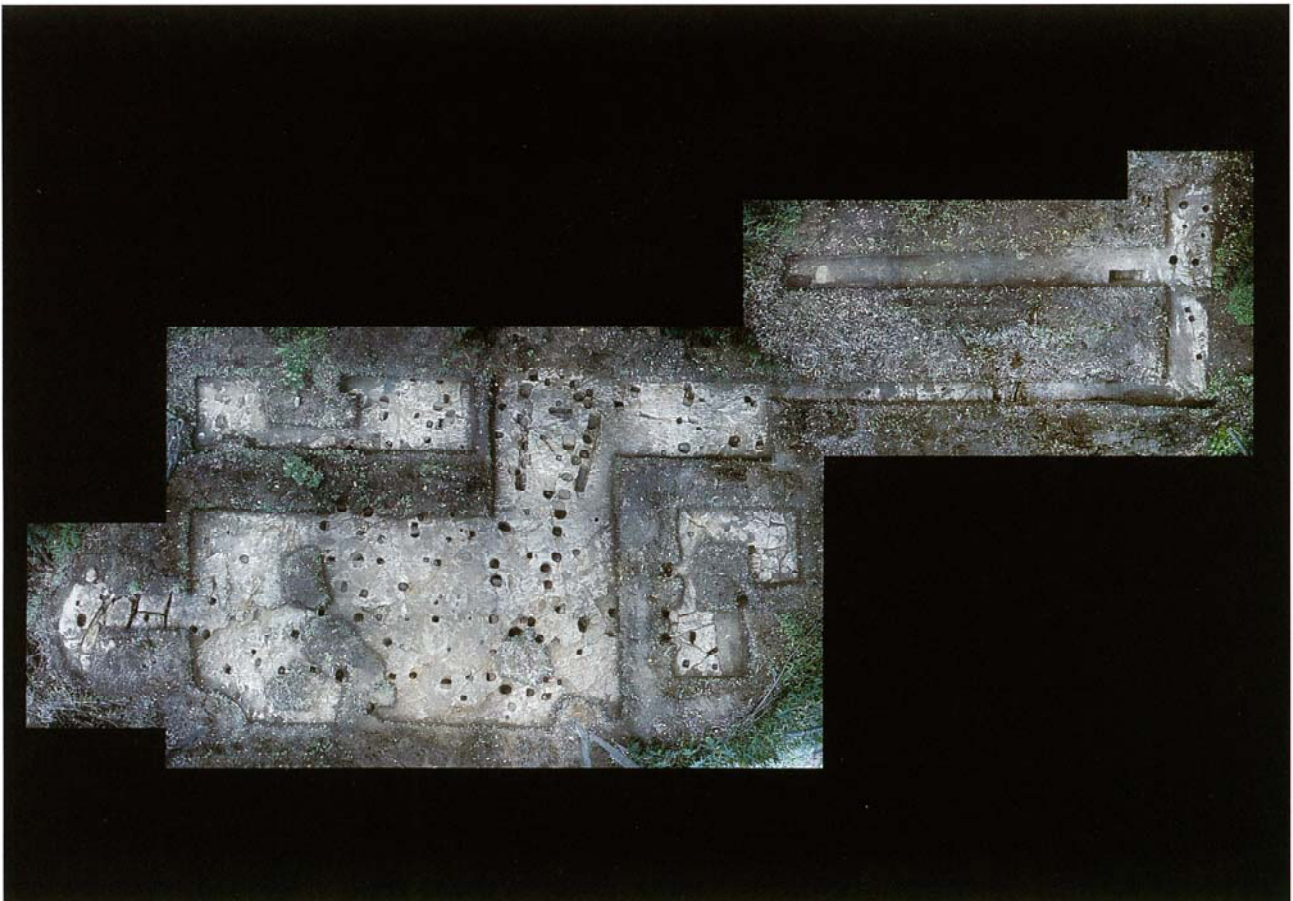


写真7 寺屋敷上部遺構状況



写真8
寺屋敷上部発掘調査前
状況



写真9
寺屋敷と寺屋敷上部間の
急崖（高さ10m）



写真10
寺屋敷上部岩盤整地
状況



写真11
寺屋敷上部G発掘区
切岸部分遺構状況



写真12①
寺屋敷上部A発掘区
門跡（東側角柱列）



写真12②
寺屋敷上部A発掘区
門跡



写真13①
寺屋敷上部柱穴



写真13②
寺屋敷上部柱穴

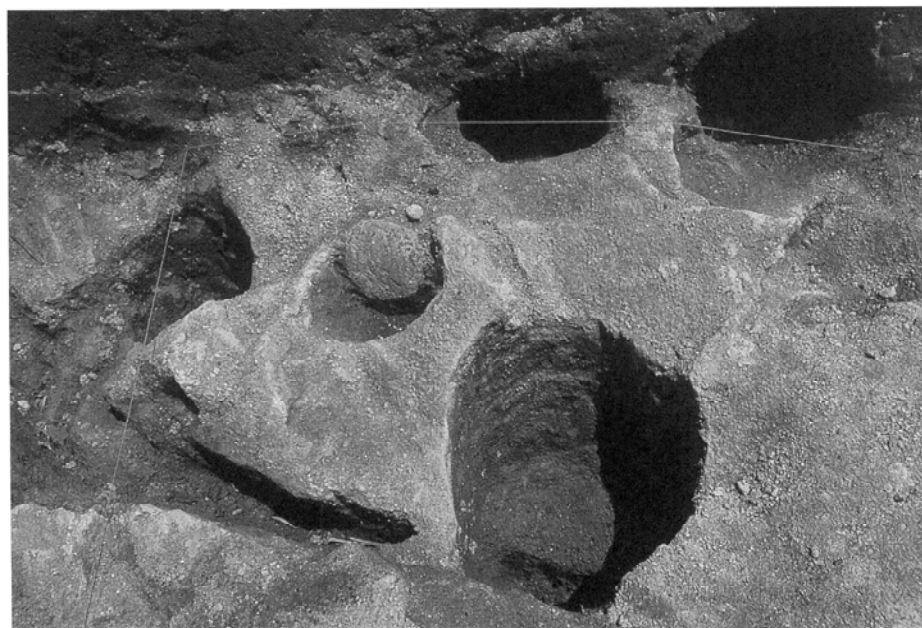


写真13③
寺屋敷上部柱穴



写真14
寺屋敷上部D発掘区
布堀跡



写真15
寺屋敷上部D発掘区布堀跡 1



写真16
寺屋敷上部D発掘区布堀跡 2



写真17 寺屋敷上部E発掘区遺構状況

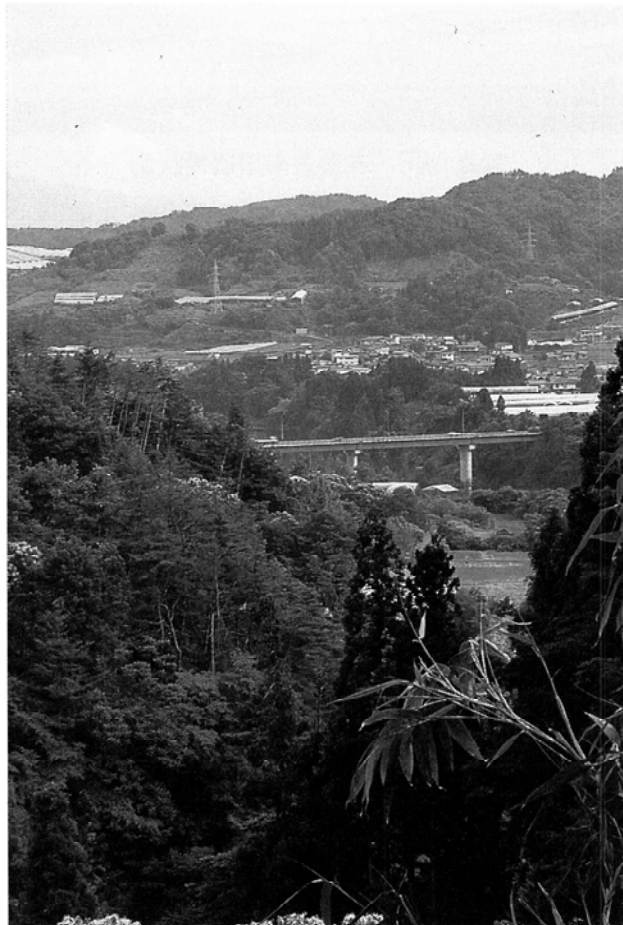


写真18 寺屋敷上部からの眺め(寒河江市中郷方面)



写真19① 寺屋敷南辺遺構状況



写真19② 寺屋敷南辺遺構状況



写真20
寺屋敷下部発掘調査前状況



写真21
寺屋敷下部トレンチ設定状況



写真22
寺屋敷下部測量状況



写真23①
八幡平遺構状況



写真23②
八幡平遺構状況

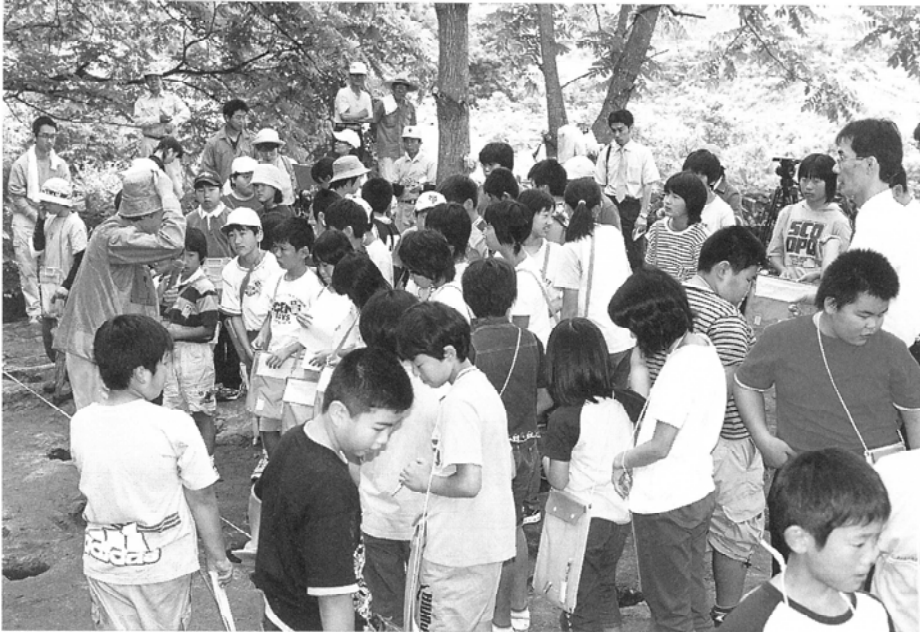


写真24
現地説明会状況



写真25①
左沢楯山城遺跡イメージ図
作成調査状況
(八幡座にて)



写真25②
左沢楯山城遺跡イメージ図
作成調査状況
(楯山公園にて)

報告書抄録

ふりがな	あてらざわたてやまじょういせき
書名	左沢楯山城遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大江町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第7集
著者名	川崎 利夫・伊藤 清郎・大場 雅之・日下部 美紀
編集機関	大江町教育委員会社会教育課文化係
所在地	〒990-1163 山形県西村山郡大江町字本郷丁373-1
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡名 <small>しよしゅうしゅういせきめい</small>	所在地 <small>しよざいち</small>	コード		北緯	東経	調査期 間	調査面積	調査要因
		市町村	遺跡番号					
あてらざわたてやまじょう 左沢楯山城	やまがたけんにしむらやまぐん 山形県西村山郡 おお え まち おおあざあてらざわ たてやま 大江町大字左沢楯山	324	324	38度	140度	2003.5.21 { 2003.7.17	660㎡	学術調査
—			23分	13分				
てら や しき 寺屋敷		324	—	001	05秒		00秒	
はち まん たいら 八幡平		324	—	38度	140度			
		324	—	23分	15分			
			001	15秒	10秒			
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
城館跡	16～17世紀	掘立柱建物跡 布堀			染付磁器片 釘		寺屋敷上部より3 時期にわたる掘立柱 建物が検出された。 中に、布堀を持つ建 物1棟も検出され た。寺屋敷からは池 状遺構に付随する建 物が検出された。寺 屋敷下部からは柱穴 数個を確認したもの のその性格は明確で はない。 八幡平より地形に 対してほぼ1列に柵 列跡らしき角柱列が 検出された。	

大江町埋蔵文化財調査報告書 第7集

山形県西村山郡大江町
あてらざわ
左沢楯山城遺跡調査報告書(6)

発行日 平成16年(2004年)3月

編集 大江町教育委員会
発行 山形県西村山郡大江町大字左沢882の1

印刷 株式会社 若月印刷
山形県西村山郡大江町大字左沢105